

## 『1923』

アクション、マヴォ、未来派美術協会、DVL ほか

2016年 3月 3日(木) ~ 4月 3日(日)

※ 週3日開廊 (木) 19:00 -22:00 (土・日) 12:00-19:00

キュレーション：アサクサ 協力：筑波大学 五十殿利治教授

アサクサは、1920年代の東京東部を中心に活動した前衛作家の足跡をたどるアーカイブ展『1923』を開催します。アヴァンギャルドの発生とアクティビズムに関わった重要なこの一時期に、絵画・詩・ダンス・舞台・建築など分野を横断した活動を展開する数人の作家が現れました。フォトコラージュや立体構成物、ハプニングに先立つパフォーマンスなど、概念を前面に引きだすアプローチが手法化され、作品の神秘性を打ち砕く反芸術の源流を形作っていきます。本展は、現存する作品が少ない大正期新興美術運動の一幕を参照し、アーカイブの記録データから、活動の軌跡を再構成するドキュメンテーションの試みです。

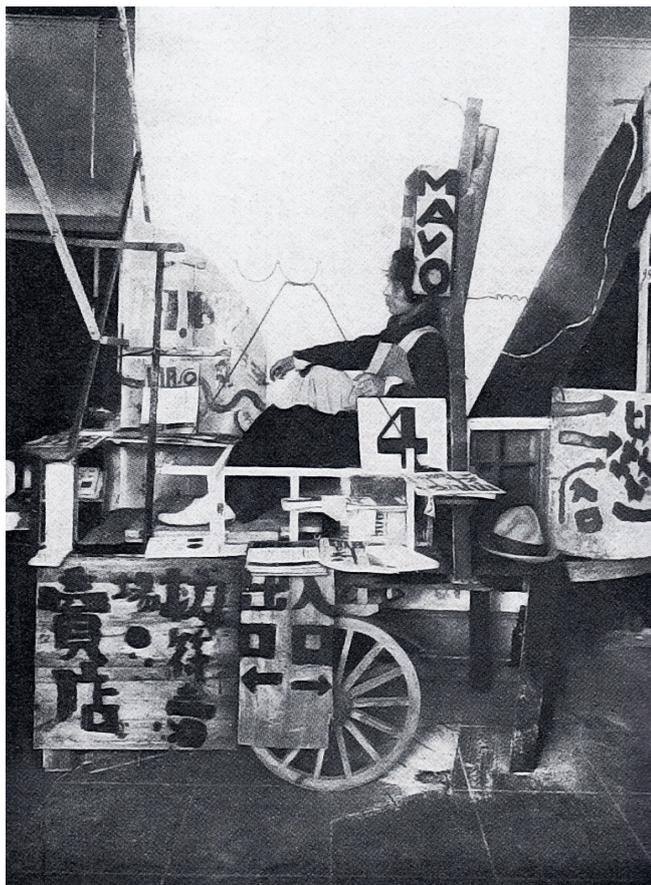
1923年、関東大震災が起り、東京の文化をかたどる街並みが一夜にして瓦解します。大正期の前衛芸術において主導的な存在となる村山知義がベルリンから帰国し、前衛作家集団 マヴォ(MAVO: 1923-25年)を結成するのもこの年です。『マヴォ第1回展覧会』(1923年、浅草・浅草寺伝法)ののち、ロシア構成主義やダダの影響を通じて総合芸術への考えを共有した村山、柳瀬正夢らは、震災後、路上へのより直截な介入を行います。仮設住宅や倒壊を免れた建築物のファサードを塗りかえるバラック装飾をはじめ、翌年の『帝都復興創案展』(1924年、上野・竹之台陳列館)では、巷で拾い集めた残骸を寄せ集めた構成物を都市モデルとして展示し、崩れ去った物質文化に対峙します。平面・空間から都市にまで広がる広汎な活動は、未来派の流れをくむ岡田龍夫のリノリウム版画、荻原恭次郎による詩構成、村山、柳瀬による舞台デザインのモデルなどとともに、機関紙『MAVO』に記録されています。

1924年になると、複数の前衛集団の合流への呼びかけによって三科造型美術協会(1924-25年)が成立。『三科第2回展覧会』(1925年、上野・東京自治会館)では、マヴォとNKKの共同制作による《門塔》(1925年)、木下秀一郎の巨大な立体構成物、パフォーマンスの要素を含む岡田の作品など、122点を会する最大規模の展覧会を開催します。当時、さまざまな思想が混在する中で、ダダやメルツとの関わりを示す広告やポスターデザイン、グロッセ風の政治風刺をふくんだ漫画など、多様なジャンルで左傾化の動きが活発化していました。岡本唐貴は当時の思想背景を色濃く反映し、展示会場で拾ったファウンド・オブジェクトを組み合わせたインスタレーション《ルンペンプロレタリア》(1925年)を展示。権威のあるものを下降させ、また弱い立場にあるものを上昇させるヒエラルキーの転覆を示唆します。こうした美術運動の社会的旋回は、倫理的な側面をとめない、プロレタリア美術へと結びついていきます。

築地小劇場で開催された《劇場の三科》(1925年)は、アクション、マヴォ、未来派美術協会、DVLなど当時の前衛集団の多様な性質が未整理のまま現れた寸劇集であり、震災後の混沌のなかから自律的・即興的に立ち上がったこの構想には、「アングラから不条理劇、ハプニングにいたる全てが含まれて、(村山回想録)いました。村山が傾倒したノイエ・タンツ、絶叫調の恐ろしく早い台詞、構成主義的な舞台装置など、共時代的な連帯と新しい時代の予感を告げ、観客に強い衝撃を与えます。本展で上演するのは、1997年に筑波大学でパフォーマンス演習として行われた《劇場の三科》再演の記録ビデオです。五十殿利治氏、水沢勉氏、川口龍夫氏のもと、現存する資料がない部分は、参加者によるリサーチと想像とで補完されています。

過去と未来が遮断した1923年の震災を経て、左翼思想やアナキズムへの共感が広がった時事的な背景のなかで三科は立ち上がり、またその思想の過激化により一年に満たずに解散しました。震災後の混沌のなかから自律的な美術運動を生み出し、反芸術の無形化を推し進めた大正期美術の集合地点で、かれらはいかなる変革のビジョンを共有しえたのでしょうか。多くがまだ20代前半だった若手前衛作家の歴史は、その後長い間忘却され、後続のアクティビズムによって塗り替えられています。この忘却をわたしたちの想像と記憶が補うとき、かれらの活動は3.11を振りかえる90年後の現在に、どのような視点を投げかけるのでしょうか。

『1923』展は、筑波大学 五十殿利治教授の協力のもとに実現しました。



マヴォ・NKK共同制作《切符売り場・売店》1925年  
『三科第2回展覧会』（上野・東京自治会館）にて



『闘争ニュース用プロレタリアカット漫画集』（戦旗社版、1930年）より



村山知義《三科会員展覧会 劇場の三科》1925年 ポスター、51.6 x 33.9 cm



高見沢路直、岡田達夫、住谷盤根《踊り》1924年（「MAVO」第3号より）

## アーティスト:

**岡田龍夫** (おかだたつお・1904年頃 北九州生まれ? - 没年不詳)は、現代美術家、アナキスト。1922年三科インデペンデント展に出品、1923年村山知義のダダ運動に共鳴し前衛芸術誌「MAVO」を創刊する。1925年には『三科第2回展覧会』(1925年、上野・東京自治会館)に出品。萩原恭次郎『死刑宣告』(1925年)、岡本潤 第1詩集『夜から朝へ』(1928年)などに、リノリウム版画による装幀や多数の挿絵を残している。「三科」解散後もマヴォイストとして舞台模型、創作舞踏発表会を開催、また街頭漫画家としても活躍。1928年『形成画報』を創刊。1930年代に国外に渡りフリーランス記者となるが詳細不明。

**岡本唐貴** (おかもととうき・1903年、岡山県倉敷市生まれ - 1986年没)は、画家、活動家、現代美術家。1924年、若手アーティスト主導による「アクション」の同人に推薦され、後に「三科造形美術協会」に参加。翌年中核メンバーとして造形を結成、自身をネオリアリズムに導いた『新ロシア展』(1927年、東京朝日新聞社屋)の実現に尽力する。1929年に創立した日本プロレタリア美術家同盟(P.P.後にヤップ)の中央委員となり、文化運動を牽引する。1932年、P.P.への弾圧により検挙・拘束。1933年刊行、即日発禁となった『新しい美術とリアリズムの問題』をはじめ、自著・共著による出版物多数。主な展覧会に、1975年『岡本唐貴展』(横浜市民ギャラリー、横浜)、2001年『岡本唐貴とその時代』(倉敷市立美術館、倉敷)ほか。東京美術学校彫刻選科中退。

**村山知義** (むらやまともよし・1901年東京生まれ - 1977年没)は、現代美術家、ダンサー、舞台作家、童画家。開成中学、一高に学び帝国大学中退。1922年に渡独し、主にベルリンに滞在、東西ヨーロッパのアヴァンギャルドと交流する。1923年帰国後に前衛集団「マヴォ」を結成、機関紙「マヴォ」創刊。1925年「三科」の結成、「劇場の三科」に参加。またカイザー原作《朝から夜中まで》など多数の舞台デザインを手掛ける。解散後は左傾化、日本プロレタリア文芸連盟に参加する。詩集『燕の書』(エルンスト・トラウ著、和訳1925年)、自著『グロッセ その時代・人・芸術』(1949年)など出版物多数。主な回顧会に、2012年『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙』(神奈川県立近代美術館葉山、京都国立近代美術館)。

**柳瀬正夢** (やなせまさむ・1900年愛媛県松山生まれ - 1945年没)は、画家、プロレタリア運動家。日本水彩画研究所に学んだ後、読売新聞社に入社。1921年、第二次『種まく人』の同人となる。1923年「マヴォ」を結成、先駆座に参加して舞台デザインを担当した。1924年「三科」創立に参加、《劇場の三科》(1925年)に出演。「三科」解散後は、無産者新聞の専属画家となり、日本プロレタリア

芸術連盟の創立に参加、1926年日本漫画家連盟を創立。主な回顧展に、2013年『柳瀬正夢1900-1945』(北九州市立美術館本館、2014年愛媛県美術館、神奈川県立近代美術館葉山に巡回)ほか。

## キュレーター:

**アサクサ** は、ギャラリーキュレーターが運営する、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・スペース。美術研究とマーケットの動向を媒介し、共同キュレーションを推進する。2015年には、倉敷芸術科学大学川上幸之介研究室、ギャラリエ・タダエス・ロバック、大和日英基金、青山 | 目黒ギャラリーと共同企画を実施。本年5月には、SCAI THE BATHHOUSEの協力により、アートフェア東京に出展予定。

## 協力:

**五十殿利治** (おむかとしはる・1951年東京生まれ)は、ロシア・アヴァンギャルド、大正期新興美術運動を専門とする美術史学者。筑波大学人間総合科学研究科教授。『大正期新興美術運動の研究』(スカイディア、1995年)、『モダニズム/ナショナリズム』(水沢勉共編、せりか書房、2003年)、『日本のアヴァンギャルド芸術 <マヴォ>とその時代』(青土社、2001年)ほか著書多数。

## 後援:

在日スイス大使館

## 展覧会情報

タイトル: 『1923』

作家名: アクション、マヴォ、未来派、DVL ほか

会場: アサクサ

住所: 東京都台東区西浅草1-6-16

開廊: 木曜日19:00-22:00、土・日曜日12:00 - 19:00

その他の曜日は予約制

プレス連絡先: 山越紀子

info@asakusa-o.com

090-4673-2745



Schweizerische Eidgenossenschaft  
Confédération suisse  
Confederazione Svizzera  
Confederaziun svizra

Embassy of Switzerland in Japan  
スイス大使館